



世界に目を向ける小さな一歩



コロナ禍、学校における教育活動は制限を余儀なくされ、学習や行事、生活は従来と異なる形を取りながら進めています。今回、『Howdy 第25号』に掲載された昨年度の本町小学校5年2組の「総合的な学習の時間」での取り組みを改めて紹介します。学校でこうした取り組みが広がることは、子どもたちが交流を楽しみながら国際理解を深めることにつながると思います。

総合的な学習の時間は、「人や地域とつながる」「追求できる」「実感を伴った体験的な活動である」ことなどが大切であると思います。子どもたちに総合的な学習の時間で大切にしてほしいことを何度も伝えながら、時間をかけてテーマを決めています。昨年度は「各国の魅力について理解したうえで、自分たちが世界に日本の魅力を伝える」ことを学習の最終ゴールと決め、進めていきました。なお、この決定には昨年のオリンピック開催により、子どもたちの世界に対する興味が広がっていたことも背景にあったと思います。



1・2学期は、調べたい国ごとにグループに分かれ、各国の魅力を集めました。観光、食べ物、衣服、スポーツ、伝統行事などのカテゴリーに分けて調べ、ノートパソコンを使ってまとめ、最終的にクラスで発表を行いました。また、調べるだけではなく、今回は現地の人の生の声を聞く機会を設けました。私の知人が台湾に住んでいましたので、オンライン

台湾から届く笑顔 クラスは大喜び(〇〇)で現地の人が感じる台湾の魅力について聞くことができました。外国への興味は距離があるのでどうしても実感を伴いにくいもの、しかし、オンラインでのつながりは子どもたちが世界について身近に感じられる機会となり興味を抱かせたようです。3学期は、学習の最終ゴール「日本の魅力を世界に伝える」、そのためにはどうしたら良いかを話し合いました。そこで子どもたちから真っ先に出てきた言葉が「パサデナ市」でした。本町小学校はパサデナ市テグ小学校と姉妹校の関係にあり、コロナ禍以前は、パサデナ市から訪問団が本校を訪れ親交を深めるなど精力的に交流活動を行ってきました。だからなのか、子どもたちの中で「パサデナ市は近い存在」という認識があったのだと考えます。そこで、クラス全員で校長先生に相談し、市役所と交渉していただいた結果、パサデナ市へ贈り物をするのが実現可能になりました。本来の予定でしたら、このような状況下なので和柄の手作りマスクを送ろうなどの話が出ていました。しかし学校閉鎖等で時間が取れなかったこともあり日本らしい和柄の折り紙を使ってくす玉、千羽鶴、折り紙で作製したマスクを届けることになりました。実際に作品の引き渡し式もでき、子どもたちは学習のゴールにたどり着いたような満足気の様子でした。

今年度私は6年生の担任、引き続き子どもたちの成長を見守ることができています。最近校長室前のパサデナ市の展示物をじっくり見ている子どもを見かけたり、世界的なニュースを口にする子どもがいたりと何かとグローバルな話題が増えたと感じています。子どもたちが興味をもっている小さなことから展開していく総合学習は楽しく、そこから国際交流につながる可能性を感じ、私自身の活動も広がりました。今後も子どもたちと創り上げていく総合学習の時間を狙いたいです。



引き渡し式
届け! 海を越えてパサデナへ

(担当 大津道雄 文 吉田菜々)